
彼は四神

泉 朋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼は四神

【Nコード】

N0401B

【作者名】

泉 朋

【あらすじ】

ごく普通の女子高生、佐伯優姫。が、彼女の平穏な日常はある人物と出会い幕を降ろす。連載携帯小説を、新たにリメイク。新・彼は四神です。初めての方も、前作拝読してくださった皆様にも楽しんでいただける様に……新生四神よろしく願いいたします。

プロローグ

雪には――花に例えた色々な言葉がある。

六花、天花、牡丹雪。ぼたんゆき

おそらく――舞うその美しさから先人が見立てた言葉なのだろう。
が、

「……………はあ」

佐伯翔太は、さえきしょうたがつくりと肩を落とし虚ろな目で駅のホームに佇んたたずでいた。

スーツ姿の20代半ばかそこらの男性。

黒い髪の毛は短く、綺麗にセットされていた。

時刻は午後9時。会社帰りの、ごく普通のサラリーマンといったところだ。

電車の時刻表と、左手の腕時計を交互に見つめながら、よくもまあ、綺麗な言葉を作ったものだ――佐伯翔太は思った。

「……………何なんだ。この“吹雪”は!!」

独り言を呟いた後、翔太は視線をホームの窓ガラスへと目をやった。

ガラスは凍てつく寒さと止めどなく吹き荒れる暴風により激しく軋んでいた。

その窓ガラス越しの外の景色は——更に酷いもので、
「綺麗」

や

「美しい」

などといった言葉は、嘘でも言えない。

風と共に舞い散る白銀の結晶は、寒さを纏^{まと}い大きな粒となって、
建物や電車に激しく打ちつけている。

バチ、バチ、バチ。

ゴオオオオー……。

「普通、雪は“さらさら”や“ふわふわ”だろ！！　なんだよ！！
この効果音は何だよ！！」

生まれて初めての吹雪。佐伯翔太は——この北国に転勤して、ま
だ1ヶ月足らずであった。

「冬だし。仕方ないし」

と言わんばかりに、周りからの視線に、翔太は深く溜め息を吐い
た。

確かに——

同僚からは冬の厳しさを聞いてはいたが、想像していたものより
も、遥かに上回る光景である。

電車が止まったり、停電したり……。物の数分で何十センチも積

もっていく雪。

こんな光景に遭遇した事は、暖かな所に長く暮らしていた翔太には――もはや一種の戦争地帯。それに匹敵するほどに凄かった。

まあ、それはさておいてもだ。

「また……なんで“こんな日”に……」

ホームを冷氣と爆風が轟く。

あまりの寒さに、翔太は白と黒のボーダー柄のマフラーに顔を埋めた。よく目を凝らせば、所々縫い目がぴょんっと解れている。

この日、翔太にとって“特別な日”だった。

一般的には“忘れ去られた日”と言ってもいいかもしれない。

結婚して3年。

翔太には1つ下の妻がいた。

尻に敷かれていると呼ばれる程に、翔太は妻を溺愛していた。

残業は致し方ないとして、仕事が終われば一目散に帰宅。寄り道は無縁。

同僚からは、

「少し遊べ」

や

「ちよつと冒険してみろよ」

など散々言われていたが、どうもその気にはなれなかった。

「……はあ。待っているんだろうな……。連絡とるにも何分待ちだよ」

思わず漏れ出す文句に、顔をしかめながら人の列を見る。
先程からずっとだ。

ホームに設置された2台の公衆電話には、普段見られない長蛇の列が出来ていた。

悲しく流れる、無機質で機械的なアナウンス。

——吹雪の為、運休。

そこをなんとか走らせろ！　と言ったところで何も変わらないんだろうな、と翔太は呆然と立ちすくんでいるだけだった。

今日は——妻との年に一度の“記念日”。

ただし、結婚記念日ではない。

その前の——2人が付き合う事となった“お付き合い記念日”。

妻曰わく、

『結婚記念日も大切だけど、2人が出会い、付き合う事になったこの日が、私には大切なの』

結婚してしまえば……どこかで忘れてしまう初々しい感情。

翔太の妻は——少し変わっているかもしれない。

だが、そんな妻が翔太は愛おしくて仕方なかった。

今日もおそらく、毎年の様に豪勢な手料理と、いつもより着飾った服装で自分の帰りを待ちわびているに違いない。

翔太は鞆から小銭入れを取り出した。普段から財布に入れる金額が少ない為、小銭入れを愛用していた。

別に妻に取られている訳ではなく、翔太自身、ジュース代があれば十分な男だったのだ。

開いた財布には……珍しく3千円。

本当はこのお金でケーキを買う予定であった。

が、

この天気だ。電車も止まったままであるし、いつ復旧するかも分からない状態。

豪華なケーキは買って行ってやれないが……早く帰って安心させてやりたい。おそらく、心配でうろうろと“いつもの癖”を発揮しているのだろうな、と翔太は思った。

「――よし。仕方がない。タクシーで帰ろう」

3千円で自宅までは少し足りない。少し歩いて距離を稼ぐ。

駅近くのコンビニに寄り、小さなケーキを1つ買ってタクシーで帰ろう。

自分に言い聞かせる様に頷き、翔太は足早に駅のホームを下りていった。

駅を出た翔太を出迎えたのは――氷点下が支配する世界。絶える

ことのない爆風が雪運び視界を遮る。冷気が体感温度を更に下げている。

ぶるっと身震いを一回、薄めのコートに身を隠し、マフラーに顔を埋めた。

突風に押されながらも、翔太は一步ずつゆっくりと進んだ。耳や鼻が一瞬で冷たくなってゆく。次第に痛み、段々と肌が見えている部分が熱くなっていった。

（はあ……もたもたしていたら凍傷確定だな）

すぐ、タクシーを拾いたくなる衝動に駆られるが、我慢だ。妻のケーキの為。

腕をさすり摩擦を起こす。ちっとも暖かくはならなかったが、気分的に幾分かましだった。

もう少しでコンビニがある。そこでケーキを買って、公衆電話からタクシーを呼ぶ。

「寒いっ!! ……もう少しもう少し……」

小刻みに体を振るわせながら、翔太は寒さで赤くなった顔をあげた。

視界は——悪い。が、次第にぼんやりとしたネオンが翔太の瞳に映った。

それは翔太の目指した場所。

「……もう少し」

もう少しでケーキが買える。しばらく暖かい店内にいれる。

翔太の足取りは自ずと早くなった。

ぼんやりとしたライトが徐々にハッキリと視界に入ってくる。
コンビニまでの距離が目と鼻の先。あと一歩。

嬉しさのあまり、マフラーに埋めていた顔をあげた——刹那だった。

コンビニと建物の間。

淡く光る球体の様なものが目についた。

一瞬。

翔太は目を疑った。

慣れない寒さで……少し頭がおかしくなったのだろうか？

いや、違う。

翔太の瞳に確かに移るものがあった。

この凍てつく寒さの中——だっぽりと肩まで下がった大きめの、
淡いピンクの着物。栗色の長いストレートの髪。潤んだガラスの様に
透き通った瞳が、焦点が覚束ないのか？ ぼんやりと遠くを見て
いた。

年齢とし、3・4才そこらの女の子。

吹雪の中、少女を取り囲む様に光る七色の光。

翔太は目を凝らした。

街路樹にうづくまる様に、そこに確かに少女がいた。手には何か持っていたが、腕で囲むようにしている為、一体何かは定かではない。

そんな事よりも――

「なっ!! 君! 何してるんだよ!?!」

この吹雪の中。

少女が一人で……どうした事であろうか。

「お父さんとお母さんは? こんな吹雪の中で……薄着じゃないか!?!」

普通に考えて――おかしい事だった。この凍てつく吹雪の中、親も近くにいず、ただ一人ぽつんと残された少女は――異常である。ただ今の翔太には、“変だ”と思ってもそこまで問い詰める思考がなかった。

身につけていたコートを脱ぎ、症状は少女へかけてやった。

「君、ダメだよ!! こんな所で……。っ、死んじゃうよ!?! ほら、こっちに……」

辺りを世話しなく見渡して、翔太はマフラーを少女の首へ巻き付けた。触れた少女の頬は、氷のごとくひんやりと、体温の暖かさはなかった。

「！冷たい！！ こっちにおいで！ ……この子の親は……一体何をしているんだ！！」

「……………れて」

少女がか細い声で呟いた。

暴風でかき消されたその声に、翔太は顔面蒼白の表情で、少女の顔をのぞき込んだ。

「えっ？」

「……………れて」

「ごめん。何？ 寒い？ 寒いよね！ ほら、まず温まろう！！」

「……………忘れて」

「えっ？」

「……………忘れて……………忘れて」

それは、翔太に言っているのかはたまた別の誰かなのか……………焦点の覚束ない少女の瞳から読み取る事は出来なかったが――

「……………忘れ……………ないで」

ぎゅっと力強く瞳を閉じ、薄らと流れ落ちる涙。そして――次に瞳を開けた少女の瞳が――燃え盛る炎のごとく、深紅色に光輝いていた。

翔太が理解出来たのはそれだけだった。

第一章・前編

第一章

動き出すもの

「――だから！ 仕方ないんだってば！！」

放課後の職員室に響き渡る威勢のいい叫び声。次に何だ何だと振り返る教職員達に気づき、前田強教諭は、ふんぞり返って鼻をならす少女を、慌てながら宥めた。

「はあ……」

深くため息をついた後、少女を虚ろな目で一瞥する。

白のポロシャツにジーンズ姿とうラフな格好。別に体育教師という訳ではない。彼の専科は社会である。

同僚の玖珂 鴉空くがあくうの様に、格好良くスーツを着こなしてみたいと思うが、どうも似合いそうにもないので楽な服装を選んだ。

だが、この選択は正しかったのかも――前田教諭は思った。

教師というのは――彼が想像していたものよりも、遥かに体力、そして精神力をつかう職種であった。

そんな状態の中、首を締め付けるネクタイや、綺麗にアイロン掛けしなくてはならないワイシャツなど――彼にとってはストレスの何物でもないからだ。

念願のクラスを受け持つ事になって、早1ヶ月。可愛い生徒達に

囲まれて——あの有名な教師ドラマの様に、

「先生！ 先生！」

と慕われる……そんな想像を膨らませていたが、たった1ヶ月。

彼が描いていた“理想像”は脆くも砕かれた。

新1年生のクラスを担当する事になり、自分も担任1年生。幾分か気が楽だったが——悩みなしで進められる程、教師という職務は楽ではない。

彼がもっていた理想などは到底生温く、よって——

「はあ……」

日々重なるストレスに、胃が痛み、こうして溜め息をつくほかなかった。

今日は出勤と同時に、学年主任から呼び出された。話は、自分のクラスのある“1人”の生徒の“癖”について——まあ、詳しくも言うまでもない。くどくどと文句を言われた。

だが、話の殆どは主任の家庭内の文句で、本人に自覚があるのか定かではないが、前田教諭はいい腹いせになっていた。

職場に家庭内の事情をもってくるなど、しかも八つ当りをされるなんて理不尽も甚だしい。

が、

前田教諭に、それを言い返す度胸や力などあるはずもなく……。

「……はあ——……」

本日何度目になるだろうか？ 幸せが一つずつ遠のいていく感情に駆られながら、前田教諭は特大級の溜め息をついた。

それを見ていた目の前に立つ少女が、眉間にシワを寄せながら言葉に声を乗せた。

「何？ 前ティ……めっちゃお疲れ気味？ ——って！ もしかして二日酔いとか！？ やめてよね！！ 休みの日にしなさいよ、飲み会は」

「……ああ。飲み会、飲み会ね。——っ！ 違う！！ 飲みになんて行っていない！ しかも俺、酒は飲めないんだ！！ ……じゃないだろう佐伯！！」

「……何よ。その、ノリツツコミ。甘いわよ、前ティ。ヤバい。面白くない」

「……面白くなくていいんだよ。別に……」

「あっ。ちょっと傷ついた系？」

「話がずれてるぞ佐伯！！ 俺が言いたいののはだな！ その“遅刻癖”！ 何とかならないのか？ ……このまま行くと留年決定の勢いだぞ！？」

声をあげ、話を初めに戻す前田教諭に、

「ああ。またその話？」

と、頭をぼりぼり掻きながら、少女は肩を撫で下ろした。少女の名は佐伯優姫。

ロングストレートの栗色の髪。身長は低くもなく高くもなく、ぱつちりとした瞳が印象的な生徒である（少し気が強そうな容姿であるが）。

問題児といっても、別に学力や生活態度（反抗的、そして敬語の使い方にいささかどうかと思うが）は悪くない。

他の生徒達を例にあげるといえるのは良くないが、比べてみても彼女は真面目な方だった。

が、癖があった。

悩みの発端はそこにあった。

“遅刻癖”。そう、これである。

入学してから1ヶ月。

彼女の遅刻回数にははや9回に及んでいた。この勢いでは、前田教諭教諭の言うとおり、“留年”の言葉がちらつくのも無理はない。だが――

「仕方ないじゃん。1人暮らしだし……やること沢山あんのよ」

優姫本人は、至って気にする事もなく、逆に強気発言をぶちかます程だ。

「いや、だからな佐伯。……本当に危ないんだぞ？　いくら成績優秀でとおっていてもだな――」

「前ティは知らないのよ!!　ヤバいんです!　怪奇現象が起こっているんです!!」

「……はあ？」

呆れ眼で怪訝な表情を浮かべる前田教諭に、優姫は大きく息を吸って——刹那、吐き出す様に言葉を並べた。

「いい？ この、つまらない授業を聞いた後の家事が、どんなに変な事か！ 前ティは分からないでしょう！？ 1人暮らしの大変さが！！」

「いや……1人暮らしは大変だ。それはよく分かる。俺だって、けっこう寂しいし……って！ 違うだろ！！ それとこれは別だ！ 佐伯、遅刻——」

「どうせ前ティは、燃えるゴミと燃えないゴミの区別もつかないで、一緒にして投げてるんでしょうが、あたしは違う！！ それは1つ1つ丁寧に！ 丹念に！ 愛情を込めて投げているの！」

「ゴミの区別ぐらいはつくって！ ……はあ。ゴミに愛情を注ぐなよ——じゃない！ だからな——」

前田教諭の言葉を遮って、優姫は更に声をあげた。

「花の女子高生が、安売りスーパーでもみくちやになりながら商品をゲットしている辛さ！！ 前ティには分からないのよ！」

「そ、それは大変だな……」

「前ティなんて！ 夕飯、楽しんでほ○弁で済ませてるんだろうけど、あたしは断じて違う！ 和食、野菜中心のメニューで健康に気を使ってるわけ！！」

「いや……ほ○弁はたまにしか……」

「分かった!? 大変なのよ!! 授業・掃除・炊事・洗濯! エンドレス! エンドレス家事!! ……まあ、だけど前ティも色々言われてるんでしょ? あの偉そうなハゲおやじに」

「はぁ……まったくだ。あのハゲおや……っ! 違う!!」

上手く乗せられていた自分に気づき、慌てて突っ込んだ前田教諭だったが、

「じゃ、そういう事で! 明日からは気をつけるから!」

佐伯優姫はひらひらと手を振り、職員室を後にしていた。

ぽつん——と取り残された前田教諭は、がっくりと肩をなで下ろし、

「……明日からは気をつけるって。……大丈夫なのかよ……本当に」

頭を乱暴に搔きながら小さく呟いた。

「はぁ……」

混然こんぜんする茜色と紫色の空を見つめながら、佐伯優姫は携帯を片手に深くため息をついた。

携帯のディスプレイには、目を細めて怒る絵文字と『もう、優姫遅いよ！ 先にみんなと遊んでるからね！』と記されたメール。彼女の友人であり、そして同じクラスの北野真由きたのまゆからのものだった。

「やばっ。めっちゃ怒ってるじゃん……」

本日は、友人、北野真由主催の『じゃんじゃん遅くまで歌いあかしちやおうよ！』の日であった。

要は単純にカラオケを歌えるところまで歌いまくりとうもので、仲良くなった友達を引き連れての交流会。

あまり騒がしい事は好かない優姫であるが、

『ダメダメダメえ！！ 優姫も絶対来ないとダメ！』

真由の我が儘が出てしまえば、“面倒臭い” そう思っても了承するしか他なかった。優姫はそういう質たちであった。お願いされたら断れない。良いところなのか悪いところなのか……。

（はあ……もう、予定ズレまくりじゃん）

忙しなく歩く人の流れを避けながら、優姫は憂鬱ゆううつそうな顔をした。

放課後、そのまま真由とその友人らと共に、そのままカラオケ屋へ行く予定であつが——担任・前田強からの思わぬ呼び出し。

それに——今日は朝から予定がズレていた優姫だった。

毎日、

「遅刻、遅刻」

と口うるさく言われるのは——優姫だって嫌になる。

今日こそは絶対しないぞ！ と計画を立て、携帯、そして目覚まし3台とテレビも大音量設定をし、タイマーを入れておいた……が、全く役にたたなかった。

つい先ほど、担任・前田強に言った訳の分からない言葉も、さながら嘘ではなかった。

『ヤバいんです！ 怪奇現象が起こっているんです！！』

これだ。

怪奇現象とは少し大袈裟な発言かもしれないが——それ意外に“それ”を表現する言葉を、優姫は持ち合わせていなかった。

優姫は夢見が多い方だった。どっぷりとその世界から抜け出せなくなる程に、濃く、それも鮮明で起きなくなる程の夢だ。

むろん、だから“遅刻しても仕方ない”とは言えないのだが、遅刻の原因は間違はなく幾度となるその“不思議な夢”が原因だった。

ただの夢といえただの夢。

怪奇現象、そこまで言わざるその夢は——見ているというより、“強引に見せられる”と言った方が適切かもしれない。

現に、セットされた携帯やら目覚ましの起床をつげる音は聞こえていた。

だが、まぶた瞼が接着剤でも付けられたかの様に重たく、その夢から覚めようと試みてみるもの——こころ心や頭は言うことをきかなかった。

幼い頃から何度も見る夢。

1年置きが半年置きになり――1ヶ月、半月、1週間……そして毎日の様に見る様になった。
それも、内容はほとんど“一瞬”から“一通り”の物語を見るかのように長く……。

登場人物は毎回違うが、その中で必ず現れる人物がいた。

桃色の着物が似合う女性。表情は凜としていて、柔和な笑みをこぼす人だった。

最初のイメージは“優しそうな人”。だが、次第に内容が濃くなるにつれ、その女性に感じた印象は“どこか寂しそうな人”に変化していった。最近、その夢の中の女性は――必ずと言っていい程泣いていた。もどかしさや切なさや……そんな形容がにじみ出て、女性から発する声はなかったが、その姿はどこか

「苦しい」

と聞こえてきそうに――痛々しかった。

唯一聞き取れるのは、

（……忘れて……わたしの事は……もう忘れて）

その言葉を何度も何度も、か細い声で繰り返していて――そこで夢は途切れる。

そして目が覚めて、慌てて飛び上がる様に起き上がり、目覚ましを覗いた時には手遅れな時間になっている、という状態が続いていた。

毎日見るその夢を、不思議と“不気味”だとは思った事はないが

「……留年は御免なんだけどなあ……。めっちゃ迷惑」

連日続く不思議な夢に、本当に勘弁してほしいよ——と、小さくため息をつきながら、優姫は休めていた手を再び動かし、短く

「ごめん。今行く」

とだけ、友人・北野真由にメールを送った。

打ち終わり

「さあ、行かなくちゃ」

と、優姫が携帯電話を閉じた——それと殆ど同時ほとんどだった。

——ずしん

地響きがした。

「……？」

何かが潰れた様な、落ちた様な……そんな音だった。一体何だろうと優姫が振り向いた刹那——

地を揺らす雷鳴に似たけたたましい爆音が、優姫の耳を強烈に突き刺した。

キーンとする耳なりに思わず耳をふさぎ、その音に疑問を投げかけるより早く、次に砂埃すなぼこりを纏まとった爆風が彼女の体を襲う。

それは一瞬の出来事で——

優姫はそのまま吹き飛ばされたのち、爆風によって、彼女は激しく地面に叩きつけられた。

……鈍い音が全身を伝って脳裏に響いた。

一体……何が起こったのか、吹き飛ばされ叩きつけられた事も、優姫は分からなかった。それを理解するのは少しだけ時間がたってからだった。

粉塵ふんじんが舞う。

——呼吸が苦しい

次第に覚めていく思考。

——何が……どうなって……

神経を激しく打つ痛みに、優姫は声にならない声をあげながら、
ゆっくりと瞼まぶたを開いた。

灰色の視界が徐々に、鮮明に晴れてゆく。

この苦しさは——粉塵によるものなのか？ はたまた……

「……うつ……」

優姫は記憶を辿たどった。

あの時——どうした？ 地響きがおこって……どうした？ 突風
が……躰からだが……吹き飛ばされた？

「……うつ……」

苦悶くもんの声が漏れる。焼けるような痛みが全神経を支配し、優姫の

フリーズした思考が覚醒していく。

「……なっ……なん……何なのよ……一体」

痛みに震える軀にムチを入れ、腕に力を込めてゆったりと起き上がる。

曖昧模糊あいまいもへいの頭に、容赦なく甲高い耳障りな叫び声が優姫の耳を震わせた

「やっ！ な、何……？」

思わず両手で耳を塞ぎ、騒然そうぜんとする周りの声に、彼女は意識をやった。

みんなは、何と言っている？

——車両。燃えてる。爆発。怪我人。……逃げろ、逃げろ——

——何のことなのか、意味がさっぱり分からない。

ざわめく声と暴れる頭を冷静に変え、状況判断をする。まず1つずつだ。

車がどうしたって？ 炎上。……車が燃えたの？ それでどうした。どうしたどうした——

優姫が言葉のパズルを解いている、その時だった。

一陣の風がその場を吹き抜けた。

「……何？」

晴れていく視界。

徐々に見えてゆく光景に――優姫は息を呑んだ。

それはどこかで見た事のある光景だった。だが、見た事のあると言っても、映画やドラマ、そういった“非現実”な“空想世界”のものであり、確かに世界の紛争地域では“テロ”や“ジャック”などを、ブラウン管を通して見た事はある。

「……え？」

が――その非現実的な世界が、今は“リアル”にここにあった。

悲鳴と絶叫が乱れ飛び、我先にと、押し合いながら逃げ交う人々。

爆音が間断なく耳を裂き、燃え盛る炎と、容赦ない爆発が所々で炸裂する。建物の破片と共に吹き飛ぶ人、人、人……。

「……あ……ああ……」

それはまるで地獄絵図だった。

優姫は、瞬きをする事も、叫ぶ事も、逃げ出す事も何も出来ずに、ただその場にいる事しか出来なかった。

何故……こんな事になったのか？

優姫の横を走り抜けていくサラリーマンらしき男性が、狂った様に何度も同じ言葉を叫んでいた。

「爆発した!!」

「テロだ!!」

「爆弾だ!!」

奇声をあげ、走り去る男性の後ろ姿を見つめ、唯一優姫が理解した事――

「……違う。違うよ……」

硝煙しょうえんと破片が舞う。

車両が圧をあげられ潰れていき、爆発と炎。

爆弾ではない。……おそらく、テロでもない。

「……違う……これは……」

優姫の瞳には――車両の上を蛇行して飛び跳ねる黒い巨体、真っ赤に光る双眼を持った“獣”の姿が映し出されていた。

人々が去ったその場には、奇妙な潰れ方をし、炎上した車両だけが残されている。器物とガソリンが燃え、異常な臭いが立ちこめていた。

飛び散ったガラスと建物の破片が、一面に広がっており、走り去る人々の足音が次第に遠のいていく。

1人取り残された優姫は、この“状態”を、肯定する事も否定する事も出来ず、ただ――視界いっぱいに映る、黒い巨体を凝視していた。

「……何……やだ……分かんないよ」

近づく漆黒の獣。それはこの世のものとは思えない、ゲームや漫画や……そう“空想世界”の生き物である。

砂埃が舞う、視界の悪い中、怪しく光る2つの深紅の瞳が、優姫だけを映していた。

「ひっ……」

小さな悲鳴を漏らし、優姫はその場を立ち去ろうとしたが――足が動かない。腹に力が入らない。

恐る恐る、視線を自分の四肢に移すと、左足首がじんわりと赤く染まっていた。

強烈な痛みが体から滲み出す。優姫はムチを入れ、それでも彼女は懸命に立ち上がる。

「……動いて……動け！ 逃げるの！！ ここから……」

打ちつけられた躰の痛みと、現実離れしすぎた“恐怖”に、激しく躰が震え、足が竦み、それ以上が動かない。

自分の躰なのに……まるで他人のモノの様に、思い通りに動かせなかった。

車両を転々と飛び回っていた“漆黒の獣”は、優姫に気づくや否や、ゆっくりと確実に彼女へ近づいていた。

そう確実と……目の前の“獲物”を捕らえる目。距離が縮まるにつれ、その全貌が露わになる。

真っ赤な瞳。真っ黒な躰。トカゲを思わせる容姿に、頭からは角の様な触覚が不気味に生えている。

口は大きく切り開かれていて、黒ずんだ躰には体毛が剛毛と生え

ていた。

「……あゝ……」

一瞬。

その、あまりの恐怖にショック状態になり、思考が優姫の周りには黒い大きな影が広がった。

——これは夢だ。

今まさに捕まかる——というその時。優姫の思考はいつになく冷静さを取り戻していた。

そう、これは夢だ。まだ夢の中にいるに違いない。

遅刻の事で、だらだらと文句を言われるのが嫌で……現実逃避。これは自分自身が見せている夢だ。そうだ。そうに違いない。覚めろ、夢なら早く……早く覚めろ！

——認めるものか……こんな、こんな有り得ない事！！

だが——夢ならば、この震えはどう説明する？ この肌で感じる恐怖を……どう説明出来るだろうか？

(……ダメだ。もう……ダメ……)

覆い被さる様に、広がる怪物の手を見つめながら、彼女が覚悟を決めた刹那、

「……え？」

怪物の指の隙間から、きらりと光る“何か”が目についた。

「……な、何？」

何かが近づいてくる。燦然と迅速に。

それは……一瞬の出来事だった。だが、鮮明に1つ1つスローモーションが如く、優姫の瞳に脳裏刻まれていく。

近づくのは、金色の剣を握った……漆黒の髪の——少年だった。

まさに駿足。遙か後方にいた少年は、一気に怪物まで詰め寄った。

怪物がその存在に気づくよりも早く、少年は間合いに入り——横薙に一撃！

響き渡る断末魔と、煌々（こうこう）と光る金色の剣。刃の軌跡に沿って、煌びやかな残像が、見事な円を宙に描いていく。

斬激の連発。

烈光が駆け巡り、金色の光が舞い上がった。

優姫は瞬きさえも忘れ、その光景を見つめた。

砂の様に崩れて、風に吹かれてゆく怪物の残り痕。

握った剣を肩に乗せ、くるりとこちらへ振り向く少年。

おかしい事だった。

この阿鼻叫喚な地獄絵図の中——

炎が上がり、悲鳴が響き……煙が舞って、ちらばる破片。

そんな中、優姫は“綺麗”だと思った。

勿論、周りの惨劇ではない。だが、不思議とそう思った。

燃え上がる赤の色に、光る金色の剣。

揺れる漆黒の髪の毛と、深い深い黒の瞳。

振り向く少年の姿を綺麗と、神秘的だと――

まるで……全てを包み込む様な、そんな何か“絶対的”な光を、
優姫は少年に感じた。

色んな事態が一気におこり、ショート寸前な思考と、打ち寄せて
くる苦痛の波が、優姫の意識をばやけさせていく。

振り向いた少年は、無愛想に優姫へ手を差し伸べる。

「……怪我はないか？」

訳が分からないまま、とりあえず

「大丈夫……だと思う」

とだけ返し、優姫は少年を凝視した。

聞きたい事は山ほどあった。が、視界がどんどん狭くなってゆく。
ゆっくりと少年に起こしてもらい、優姫はは絞り出す様に少年へ
問いかけた。

「……あなたは……一体……？」

思考が混濁こんだくしていき、何が何だか理解出来なくなつてゆく。
少年は少し戸惑せうってから、静謐せいひつな口調で言った。

「……俺は」

優姫の瞼まぶたが閉じていく。

「俺は……あんたを護衛する者だ」

優姫が、その言葉を聞いたかどうかは定かではない。
少年の発言と同時に、優姫は意識を手放した。

漆黒の空間。

何も見えない、真っ黒な世界。

その空間に、一筋の光と誰かの声が聞こえた。

（――ここにいたの？）

（……………）

（あは。この場所が好きなの？）

（……………ああ）

（私も……………）

(……そうか)

(うん。ここは……あなたと出会い、みんなと出会った大切な……大切な場所だから)

(………)

(……おかしいよね)

(……何がだ)

(望んではいけないのに、それを強く叶えたいと願ってしまう)

(………)

(……許されないのに、望んではならない事なのに)

光が強く膨らむ。

聞こえていた声は、次第に小さく小さく……

(……1つ教えてやろうか)

(護る事も、戦う事も、人を愛する事も……全てを教えてくれた人がいる)

(……うん)

(それは――)

閃光が爆散する。

漆黒の空間が、眩い光に変化する。

——それは……

（それは……？）

声が消え、みるみる白い何か近づいて——

（あれ……？）

混濁する意識の中、次に優姫が目覚めたのは——白い天井、白いカーテン、点滴に花瓶にささる花……見慣れない一室だった。

真っ白なシーツを握り、優姫はゆっくり体を起こす。

やわらかい日の光が、カーテンの隙間からこぼれ、ふんわりと暖かな風が彼女の髪を遊ぶ。

「……………」

乱れる髪の毛を押さえ、優姫はぼんやりと考えていた。

ここはどこだろう。

何が起こったのだろう。

……今のは何？

少し前まで聞こえていた声。あの脳裏に残る、懐かしい残滓^{ざんし}。だが、内容は虚ろだった。いつもと違う、どこか懐かしく、記憶に残

らない夢……？

（あれは……夢、だったの？）

分からない。一体何が――

髪を押さえていた手を額に当て、思い返す。

何か重要な事だった気がするが――ダメ、思い出せない。

漏れる溜め息と同時、部屋の扉が静かに音をたて開いた。

はっと我にかえり、優姫は扉へと視線を向ける。――見慣れないこの一室に、見慣れた顔が覗かせた。

「あっ、優姫いゝ！ わぁゝ気がついたんだねっ」

「えっ？ ま、真由？」

ウェーブのかかったブラウンの髪。ほっそりとしているが、決して痩せすぎではない理想な体系。

長いまつげと、くっきりとした黒い真珠の様な瞳が、優姫を見つめる。

真由――優姫の友人でもあり、学校のクラスメイトだ。

真由は柔らかな笑みを浮かべ、嬉しそうに優姫のもとへ近づいた。

「もー。すんごーい、心配したんだからねっ！ いつまで経っても優姫来ないし、連絡入ったと思ったら優姫のおじさんからだったし」

一体、何の事か――突然の事に理解出来ず、優姫は怪訝な顔で真

由を見た。

「えっ、ちょ、待って。……ごめん。何？ 分かんない」

「あのね、ほら、優姫とみんなで遊ぼーって約束していた日。あの日ね、“爆弾事件”があっただよう」

「ば、爆弾!？」

「そっ。爆弾」

爆弾——そうだ。あの日……。

優姫は記憶をさかのぼった。

そうだ。

確かに……あの日、真由と約束していて……。

「もー。真由、びっくりしたんだからね!! 優姫が巻き込まれて、入院してるって言われたから……。なかなか目を覚ましてくれないし……」

真由は目を潤ませながら言った。

ぐすんと鼻をすする真由を横目で見ながら、優姫は理解した。

「入院……そうか、あたし、あの時、意識が……」

意識がなくなって……そう、それからの事は覚えていない。気がついたらここにいた。

少しずつ出来事を辿り、優姫は思い出す。

舞い上がる粉塵と、逃げ惑う人々と、燃え盛る炎と……黒い塊。
紅い目……金色の――

「……あれは……夢だったの？」

優姫は呟いた。

「えっ？ 何？」

「いや……何でもない」

きよとんとする真由に、優姫は苦笑しながら返した。

あれは……夢？

いや、でも真由の話からすると……だけど、爆弾事件だったって
言ってるし。

述懐する優姫に構わず、真由は話を付け加えた。

「でもね、不思議なの」

「……不思議？」

「うん。不思議」

「何が……？」

「真由、あんまりニュースとか見ないし、ママから聞いた話なんだ

けど」

「……？」

「爆弾事件って言われているけど、全くその痕跡がないんだって」

優姫は言い知れぬ寒気を背中に感じた。鼓動が早くなる。

震え出す軀を真由に悟られない様に、優姫は平然とした口調で促した。
うなが

「それで？」

「何かね、原因というか、そーゆーの全然理解出来ないんだって。

要はいきなり爆発したってやつ？ 一台ならともかく何台も。怪奇事件だって。朝見たニュースのおじさんは、宇宙人の仕業だあー！
！ って言ってた」

「はあ……そう」

相変わらずの、幼稚な口調の真由の言葉を流しながら、優姫は1
つだけ耳を傾けた。

宇宙人の仕業。

もし、あの事が夢でも幻でもなく——リアル本当な出来事であったなら
……。

「優姫はちゃーんと体を直す事に専念してね！ ノートは可愛く、
真由が書いていてあげるから」

「いや、フツーに書いてくれればいい。うさぎとかクマとかはいらない」

「えーっ！　じゃあ、ネコさんとかは？」

「だからフツーに書けて……」

「そうそう！　今日ね、すごくカッコイイ転校生が来たのお」

「真由……あたしの話、聞く気ないっしょ？」

楽しそうに笑う真由を一瞥し、^{いちべつ}込み上げる不安を隠すように、優姫はただ苦笑しているしか出来なかった。

——あれは、ただの夢？　それとも——

悪寒を感じつつ、大丈夫。そう、夢よ。あんなこと……あつてたまるか。

祈るような思いを浮かべ、真由の他愛もない話を、優姫はしばらく聞いていた。

軽い捻挫^{ねんざ}と切り傷、ショックによる疲労、精神不安定——そう診断され、検査も合わせて4日。

別に大した事ではなかったのだが、半ば無理やりな入院生活。

「——なんか、すんごい久しぶりな気分」

どんよりとした表情で、優姫はおもむろに席についた。

昨日退院し、5日ぶりとなる学校。本日は珍しく遅刻はしなかった。

教室に入る前に職員室に寄り、担任・前田強教諭に軽い挨拶を済ませてきたばかりだ。

『おっ。退院したばかりなのに、遅刻しなかったなんて！ 佐伯、気合い入っているな！ いい事だ。これからも頼むぞ』

と言われたが――正直、本日はゆっくりと午後の授業だけ受けようとしていた優姫だった。

遅刻せずに来れたのには、いくつかワケがあった。別に早く来て来て来たわけではない。

この入院していた数日、病院の起床は早い。体が自然と慣れてしまった――そういう単純な流れである。

それに――あの悩まされていた“夢”も、“あの日”以来、全く見なくなった。

それが本日、遅刻せずに登校出来た最大の理由でもある。

お陰で遅刻更新はストップしたが、何年も見続けていた“夢”。かえってそれがなくなった事に、不気味な違和感を感じる程だった。

「何だろう……最近、本当変な感じ」

言い知れぬ懸念を抱きながら、ぼんやりと思い耽^{ふけ}る優姫と打って変わり、クラスメイト達は朝から大盛り上がりしていた。

「退院祝いと連続遅刻の更新ストップ!!」

「ダブルだ! ダブル祝いだぜ!」

「今日は宴会ですか? おい、誰か幹事やれ!」

「はいはぁーい! 真由やりまーすう」

まったく……好き勝手に騒いで——胸中、そんな事を浮かべつつ、優姫はざわめくクラスメイト達の言葉を、流しながら聞きつつ、真由から貰ったノートへ目を通していた。

。

あんな事件が身近で起こっても、こうも元気に騒げるクラスメイトの凄さに、呆れが半分と、ある意味尊敬が半分と——

「はぁ……」

優姫は大きく溜め息を吐いた。

「なぁーに? 優姫おばさんクサイよぉーう」

1人耽る優姫の顔を覗き込み、友人・北野真由が眉間にシワを寄せながら言い寄った。

真由の言葉を、優姫はさらりと流しながらノートをめくる手を止

める。

「いいのよ、別に。ばばあでも」

「ダメダメえ。溜め息ばかりついていると、幸せがおて手を繋いで逃げちゃうんだよう？」

「……何よ、それ」

優美^{ゆうび}に笑う真由の顔を、しらけながら流し、優姫は再びノートへと視線をやった。

あれだけ普通に書けと言ったノートには、うさぎと亀が競争している、パラパラ漫画が描かれていた。

（……亀が勝つ童話なのに、うさぎがそのまま勝ってどうすんのよ）
たった4ページほどで、うさぎがゴールし、ゆっくり歩く亀を待つ間、意味不明なうさぎのダンスが永遠と描かれている絵。

いつもながらに、真由のセンスはよく分からないが、問いかけたところで――

『だって、うさぎさんの方が可愛いんだもん』

なんて言うに違いない。

「……………」

突っ込みたくなる衝動に駆られながら、にっこり笑う真由の顔を一瞥し、苦笑を浮かべながら優姫はただ黙っていた。

あーでもない、こーでもないと、依然と優姫の祝い（宴会）話に花を咲かせるクラスメイト達の会話の中に、聞き慣れない名前に優姫の手が止まった。

そういえば――

（転校生が来たんだっけか？）

入院中、真由が嬉しそうに言っていた転校生。

カッコイイとかクールとか……取りあえず興味がないので聞き流していたが、

「ねえ、真由」

優姫は真由に問いかけた。

「なに？」

「あのさ……ほら、言っていた転校せ――」

教室のドアがクラス中のざわめきをかき消して開けられた。

入ってくる生徒を見て、嬉しそうに声をかける真由。クラス中の生徒達の視線が、その生徒に集まり、男子生徒の佐々木鉄也が、その生徒に近づき話しかけた。

「おい、天野。おまえも来るだろ？」

「……何が？」

「今日な、ほら、窓際に座ってるやつ。天野知らないもんなー！
アイツが入院していた、佐伯」

「……………」

「今日、アイツの退院祝いやろーって話でさ！ おまえも来るだろ
？」

「……構わない」

その生徒の言葉を聞いて、真由が歓喜の声をあげた。

「わぁー！ やったあ、竜くん、真由と一緒に遊ぼうねっ。——そ
うだ！ ほら、竜くんこっち！」

真由に引っ張られながら、その生徒が優姫の目の前に突き出され
た。

「ほら、優姫っ。真由が言っていた転校生の人だよっ」

楽しそうに話を進める真由とは変わり——優姫は硬直していた。

あの日の——あの時の記憶に戻っていく。

燃え盛る炎の中、もみくちゃになりながら逃げ交う人々と、爆音
と爆風と……乱れ交う悲鳴と絶叫。

黒い体と紅い目の獣と……そして——

「竜君、自己紹介してあげてよ」

笑顔で促す真由に、その生徒は一瞬戸惑いながらも、無愛想に優姫へ言った。

「……天野竜です。よろしく」

夢ではない事、幻を見ていなかった事、半分確信していて、残りの半分は信じたくなかった事――

全てが動き出す。多分、ずっとずっと前から……

優姫はただ、呆然と見ていた。

漆黒の髪と瞳を持った――あの日のあの時の、獣を切り裂き、金色の剣を持った……少年を。

《前編・終》

第一章・前編（後書き）

初めましての方も、リメイク前作品からお世話になっている方も

泉朋です。

彼は四神、第一章・前編を拝読いただきありがとうございます。
リメイク版のこの作品、前作のストーリーとはまた違ったお話と
なっています。

キャラクターは変えずに、物語に重みを……をテーマに頑張って
これからも執筆していきます。

まだまだ至らないところがありますが、感想などありましたら、
この泉朋にお知らせ下さい！

では——第一章・後編でまた……

第一章・後編

第一章

動き出すもの

《後編》

——胸騒ぎがする。

起動させただけのパソコンをぼんやりと眺め、胸をえぐるような不安に佐伯翔太は脅おびえていた。

あの不思議な出来事から——早12年の月日がたった。

あの“吹雪の中の少女”の両親を、出来るだけの力を使い探してはみたが、見つからない。否、存在しなかったのである。

元々……子供は欲しかったし、妻の持病で子に恵まれなかった事もあり、すんなりとあの少女を養子に——いや、我が子として愛し、今日まで育ててきたのであるが……

「……落ち着け、取り乱してどうする……」

胸騒ぎ——分かっていた事だった。

あの日、あの吹雪の日——娘と出会った日。

娘が呟いていた言葉、容姿、抱え持っていた物……紅い瞳。

感じていた事があった。——有名な童話がある。大切に大事に育

てた娘が、どこからか使者が来て本来のあるべき所へ帰っていく話

童話の物語であるが、高校生にあがって自立を始めている娘。どこか似ているものがあり翔太にとって人事ではなく、そのうち本当に……？

「どうして俺は……いや、落ち着け」

後悔。

高校入学と同時、1人暮らしを始めた娘。

もっぱら許すつもりはなかったのだが——1人暮らしをしたいと申し出た娘に対し、出た言葉は翔太自身が驚くほど逆なものだった。

『——大変だぞ？ ま、おまえも高校生になるしな……少し自立するのでもいいだろう』

どうして……自ら手放す様な事をしてしまったのだろうか？

まるで、何か大きなものに引き裂かれていく——そう例えるならば“運命”の様なものを。

自分の意志ではない事を口走る、手放したくないのに導かれる。

それに、最近起きた事件。巻き込まれた娘——どうして、どうして連れ戻さなかった……

「——監督、いいですか？」

イヤホンを伝い響く声に翔太は、はっと我に返った。

「な、なんだ？」

「あの……ちょっと機械の方が」

「分かった。今、行く」

無線機ごしに短く返し、翔太は席を立った。

今は仕事中だ。

何を考えている。

落ち着け、落ち着け。

垂れ流れ落ちる汗を拭い、翔太は溜め息一つ吐き、平常心を取り戻す。

いつもと違う翔太の声色こわいろに、部下が不審に思ったのか……声をかけた。

「……監督？　どこか具合でも悪いのですか？」

「いや、少し考えごと……何でもない。気にするな。作業はそのまま続行」

汗ばんだ拳を力強く握り締め、よぎる不安を蹴散らす様に翔太は仕事場へ歩き出した。

——胸騒ぎ。どうか気のせいであってくれ——と、天に祈るに胸中で願ながら。

◇

「……不気味だわ」

昼休み——オレンジジュースを飲みながら、優姫はぼつりと呟いた。程よい酸味が口の中に広まる。

睨みつける様な彼女の視線の先には——転校生、天野竜の姿があった。

あれから一週間。

——何か起こるかもしれない。

抱いた直感に警戒していた優姫だが、何も変わらない日常生活が過ぎていく。

だが——逆に“普通”すぎる。変化のないこの生活に、優姫は不気味な違和感を感じていた。

転校生・天野竜は——これといって変わりはない、普通の少年だった。多少……否、無愛想すぎるのが難点だったが、特におかしなところは見当たらない。向こうから話しかけてくる事も、あの日の出来事について触れてくる事もない。

強いて異変をあげるならば、1つだけ——やたらと女子生徒に人気であるという事だ。

その人気は他のクラス、他の学年からも彼を見ようと教室に押し掛けてくる程に凄く、確かに、天野竜の容姿は格好いい方だと優姫自身も思った。

タイプか？ といったらまた別だが、女子生徒が騒ぐのも無理はない――テレビに映っている芸能人と匹敵する程といったら大袈裟なのかもしれないが、否定する事も正直難しいところだ。

だが、その程度のものであり、優姫が警戒していたものは一切なかった。

――見間違い……だったのかな？

そう思ってもみたが、見間違えるはずがない。彼だ。間違いなく、あの場所にいた、あの得体の知れない怪物を倒した少年……間違いなくこの男、天野竜だ。

「――どーしたの優姫？ ダメだよお、おっかない顔になってるよお？」

にっこり笑いながら、北野真由が優姫の顔を覗き込んだ。

「……いいのよ、別に。元の顔が恐いのよ、あたしは」

「ダメダメええ！ 優姫はカワイーんだから、もっと可愛く笑ってなきゃ」

「そ。ありがとうー」

苦笑しながら相槌^{あいづち}を打ち、さらりと真由の言葉を受け流す。長い付き合いで覚えた、優姫独自の真由の長話攻略法である。

「……それにしても、変よ。あいつ……」

本当に分かってるのーと口を膨らませる真由を宥めながら、優姫は再び、視線を竜へと移した。

「何が変なお？」

真由も彼女の視線の先へと目をやった。

「……竜君がどうかしたの？」

優姫の瞳に映る竜の姿に首を傾げ、真由は怪訝な表情を浮かべた。

「いや、別に……なんていうか……」

——あの事件、実は変な怪物の仕業で、その怪物を倒したのがこの男なんだ！——とは言える訳もなく、

「いや、ほら。おかしな時期に転校生って変じゃない？ どーゆー家庭環境なのかなあーなんて思っ」

あは、あはと苦笑しながら、優姫は適当に話をはぐらかした。言ったところで信じてもらえるはずがない。

「あーそういえば竜君ね、中国から来たんだってえー！ 凄いよねっ」

真由の発言に優姫は驚き、声をあげた。

「ちゅ、中国！？ 何アイツ、帰国子女なわけ？」

「優姫入院していたから聞いてなかったもんね！ そうだよ、帰国子女なんだよ！ ますますカッコイーよねっ！ みんな言ってるよ

」

「……帰国子女と格好いいとは別な気がするけど」

だが1つ、優姫にはこれで分かった事があった。

（へー。どうりで人気なわけね。面だけじゃなく、帰国子女なんていう珍しさに寄ってるって事ね）

そんなひねくれた述懐じゆわいを浮かべ、苦笑しながら優姫は言った。

「で、真由も物珍しさに騒さわぎ立てている1人という訳ね」

「違うよおー！ 竜君はホントーにカッコ良くて面白いんだから」

「……はいはい。面食いだもんね、真由は」

呆れ顔で答える優姫にむっと顔を歪めながら、真由はふてくされた。

——ああ。ヤバい。怒らせちゃった……。

真由が怒ると、とてつもなく長話になり厄介な事になることも、長年の付き合いで理解している優姫は、話を区切って別な話題を投げかけた。

そうでもない……1日中、真由の説教が続くのである。

「そーそー、アイツ家族は？　なんか偉そーな企業勤めとか？　帰国子女とか、そんないいとこのボンボンには見えないんだけど」

話をはぐらかされた事は、真由自身も分かっているのだが――問いかけられたので答えるしかない。

「うー」

と不満そうな声を漏らしながらも真由は言った。

「いないみたいだよ、家族は。真由も聞いたけど1人でこっちに来たんだって」

「ひ、1人！？　また何で……って、もしかして出稼ぎ！？」

優姫のボケに真由が突っ込んだ。

「あは。そんな訳ないじゃん」

「いや、それは分かってるけど。……なんかやっぱ変だよアイツ」

この時期に何もなしに転校、しかも帰国子女……家族はいない――そんなのってやっぱりおかしい。

その前に何もしなければ疑う事もなく――変わってる人なのね。という程度で済まされたものなのかもしれないが、今の優姫にとっては何から何までも、天野竜については不気味で仕方なかった。

「うーん。真由は変とは思わないけど――そうだ！」

顎にあてがった手をおろし、何か気づいたのか、ぽんと両手で叩

きながら真由はにこやかに言った。

「次の日曜日ね、みんなで竜君のケータイ買いに行こうって事にな
っているんだけど——優姫も行こうよ！」

「はああ？ ケータイ？」

唐突な意味の分からない誘いに、優姫は言葉を聞き直した。

「そっ、ケータイ。真由がね、竜君にケー番教えてよーって言った
らね、竜君何て言ったと思う？」

「……知らないわよ、そんなの」

「“ケー番とはなんだ。なんかの暗証番号か？” って言ったんだよ
ーう！ 面白いよねえ」

「……面白くないわよ」

「でね、ケータイの番号の事だって教えてあげたり、ケータイ自体
知らなかったみたいだから、色々みんなで竜君に話してあげたんだ
あ」

「……で？」

分かっていながらも、優姫はその先の話を真由に促した。
要するに話は——
うなが

「竜君がね“それが連絡手段なのか。なら持とう” って言ったから

ね、みんなで“じゃ、買いに行こうよ”って事になったのお！
ねっ、ほら優姫も――」

「却下」

真由の言葉を区切り、優姫は断った。

取りあえず、携帯電話を持っていない天野竜に、携帯電話を持たせよう……そういう事なのだろう。

たったそれだけの事。折角の休みに、わざわざ知らない、しかも不審極まりない男の為に掛けるなど御免である。

だが――

「一緒に行こうよぉ～！ 真由、優姫と一緒にいい！」

「……………」

「ねっ、ねっ！ 優姫も竜君の事、なんか気になってるみたいだし、
竜君に色々聞いちゃいなよぉ～」

「……………」

「行くの！ 優姫も一緒に行くの！ 真由、優姫と一緒にじゃなきゃ
嫌だ嫌だ嫌だぁー！！！」

「あ――！！ もう、分かったっつーの！ 行けばいいんでしょ、
行けば……」

結局はいつもの真由ペースである。お願いされては……断りきれない。むしろ強引に話に乗せられているだけなのだが――
(はぁ……また、この展開)

胸中で溜め息を漏らすもの、嬉しそうに喜ぶ真由の笑顔を見ると何も言えなくなり、

「あたしって……押しに弱いタイプなのかしら……」

優姫はぽつりと呟いた。



「――ええ、絶対こっちの方がいいよおう！」

「……………」

日曜日、正午。

行く気はさらさらなかったが半ば強制的に引っ張られ、佐伯優姫はげんなりと肩をなでおろしていた。

「あつ、やっぱりこっちなぁ？」

あれやこれやと色々手に取る北野真由を、虚ろな表情で見つめる事おそよ30分。

家電製品店の携帯販売コーナーの一角、真由とクラスメイト数人の「あーでもない、こーでもない」という議論の声が響きわたっていた。

みんなから少し離れ、後ろから見守る優姫は、本日数回目の溜め息を漏らす。

「……はあ」

別に他人の事なのだ。そんなに、みんなして気合いを入れて選んでやる事もないのに——そう思ってしまう。

この企画の主役である天野竜に至っては、全く関係ないと言わんばかりに無関心、終始無愛想面で優姫と同じく、みんなから距離をとって眺めていた。

全然関係のない優姫は余所にして、この主役である天野竜自身がこの態度。

(……ったく。誰の為にみんな選んできるとかってんのよ)

横目で彼を盗み見て、優姫は述懐した。

まあ、自分の事を棚にあげている気もするが、それにしてもこの男は不謹慎だ。優姫はそう思った。

色々と物色し、両手にピンクと白の携帯電話を握りながら、真由が笑顔で天野竜へと問いかけた。

「ねー、竜くん。どっちがいいと思う？ やっぱ真由はピンクがいいと思うのぉ」

「……………」

無言で見つめる竜。間髪入れず、クラスメイトの佐々木鉄也が真由の問いにつっこんだ。

「ば、ばっ！ 男にピンク、しかも持ち手は天野だぜっ！？ 似合わないって、マジ」

「……………」

もめる2人をしれっと流し、尚も無関心に立つ天野竜を見て、つか、本人どうでもよさそうなんだから、ピンクでも白でも何でもいいんじゃないの？——というつつこみは、優姫はしないでおい

結局——

1時間半にもおよぶ議論の末、

「——じゃ、また来週選びに来ようね！」

真由が笑顔で言う。

あくまでピンクを主張する真由組（女子が大半）と、シルバーを選ぶべきだ（男女が大半）と言う鉄也組に分かれてしまい、話がまとまらず、天野竜に選択を迫ってみるもの——

「……………」

無言。

竜はどちらの意見にも耳を傾けず、勝敗は決まらなかった。しかも極めつけは——天野竜、保護者不在の為購入許可がおりなかった。

「なんていう……くだらない……オチ」

どんよりと目を細めながら、優姫は注文したカフェラテを口にしました。

決まらずに終わった『竜君に携帯電話を持たせよう企画』の後、なんだかスッキリしないな、と佐々木鉄也の考案によって『今日は騒ぎまくろう企画』に変更。一路、ひとまずカフェ・アンジュに向かい――

「どーすっかなあ……このままカラオケにしますか？」

「いや、ボーリング大会なんかも」

「までまで。落ち着くんだみんな！ バッテイングセンターで打ちまくるというのも……」

「ないな。それはないな」

「じゃ、どーするんだよ」

これからの予定について、再び議論するクラスメイト達を横目に、優姫は退屈そうに黙々とカフェラテをすすっていた。

ぞろぞろとカフェ・アンジュを出て、移動を開始するクラスメイト達の後ろ姿を、優姫は肩を揺らし

「ぜえ、ぜえ」

と息を張り上げながら睨みつけていた。

「……キビシーわ。この人数対1。つつこみが明らかに少なすぎる」

ぐったりとし虚ろな表情で優姫が眩き、その隣を楽しそうに歩く真由が、不思議そうに優姫を見る。

「優姫、なに言ってるか分からないよお」

「でしょうね。ご理解頂けてるのであれば、こんなに疲れてないっつーの」

ひねくれた口調で真由に言う。

結局、いつもこういう役回りなのだ。

あれこれとこれからの予定について話していたまでは、うるさいな、と思いつつも我慢出来た。

が、議論だけで終わるなど……そう簡単にいくはずもなく、決まらない今後の予定を決定する為、クラスメイト達はワイワイとあみだくじ大会をはじめ、仕舞にはじゃんけん大会まではじめ、極めつけは腕相撲まで開戦。

カフェとは——まったくゆったりと過ごす場所である。

あまりの酷さに優姫は止めに入ったのだが、彼女1人では手が足りず、店の店員にこっぴどく怒られ、逃げ出す様に平謝りをしながらクラスメイト達を連れ出した——

「災難だわ。今日の占いはワースト1位だったのよ。そんなでもって、団体行動は控えてね！　なーんて運勢悪いのに、説明する女子アナは何故か楽しそーに話すのよ」

「優姫？　意味分かんないよ……疲れたの？　ダメだよぉおばさんくさいよぉ」

「うるさい！　一体誰のせいだ、誰の！」

この正論なるつつこみも、真由やクラスメイト達には利かず、

「佐伯、どーした？」

「イライラしすぎたよ？　カルシウム足りないんじゃない？」

「牛乳飲めよ」

「情緒不安定だな」

「あっ、優姫いゝもしかして生理？」

などと返り討ちにあう。――自分の発言は間違っではないはずなのに。

「……はあ」

言いたい放題発言するクラスメイト達を後目に、疲労がかったため息を一つ、肩を使い大きく吐き出した。

大合唱の如く、会話をしながら進むクラスメイト達の後を付いて歩く。カフェから出て、遊歩道へ続く小道へ入った。

休日とあって、普段より行き交う人が多い。

——結局どこに行く事にしたのだろうか？

虚ろ目で人の流れに逆らいながら抜けて——

しばらく進むうちに、優姫は妙な肌寒さを感じた。

肌寒い雪国の春だ。少し薄着すぎだったかな——と思っててもみたが、何故かそういう体感的な“寒さ”とは違う気がした。

どう説明していいか分からない。不吉な予感が唐突、優姫の頭に駆け巡った。

ぞくぞくするような感覚に、優姫は体を抱きすくめるようにして立ち止まる。

「？ どうしたの優姫」

突然立ち止まった彼女に、真由は怪訝顔で問いかけた。うるんと潤んだ瞳が優姫を覗き込み、そんな不安が籠もる真由の瞳に優姫は苦笑して答える。

「いや……何でもないよ。ちょっと薄着だったみたい」

本当は何でもなくない。悪寒が次第に激しくなる。

——この感じ。嫌だ……知っている。

「優姫……大丈夫？　ちょっと顔色悪いよ？」

心配し、肩に手を当てがる真由に、

「大丈夫、たいじょーぶつ。ほら、行こっ」

抱きすくめた腕を解き、にっこりと笑顔を向けて一步を出したが、横から強引な制動をかけられ、再びその場に止まった。

「……えっ？」

「……………」

無愛想な横顔が、ちらりと優姫の方へ向けられ、力強く握られた手首に、優姫は**まなじり**が裂けそうなくらいに目を開いた。

「なっ……!!」

——何なのよ！　あんた！？　そう発言しようとした言葉は、手首を掴む漆黒の髪を持ち主——天野竜の言葉によって遮られた。

「……悪い。借りる」

唐突な彼の行動に、優姫と同じくもの問いたげな真由に向かって竜はぼそりと言った。

「え？　竜君借りるって……」

「……悪い」

彼はそう言って、握った優姫の手首を更に力を入れ、強引に駆け出した。

「――な、何!？」

問いかける事も逆らう事も出来ずに、優姫はただ彼に引っ張られるままその場を後にした。

「はあ、はあ……」

高ぶる鼓動と、荒い息づかいと――ぎこちない沈黙が流れた。

全速力で引っ張られ、やっと彼が足を止めたのは――人^{ひと}気のない小さなグラウンドだった。

いつもなら野球に明け暮れる、少年野球クラブが占領しているのだが、今日は日曜日。休み、という事はないだろう。おそらくどこか別の野球クラブとの練習試合に出かけたに違いない。

「何なのよ、本当……」

優姫は息を整えながら、しれっと彼女へ視線を送る天野竜へ問いかけた。

あれだけ全速力で走ったのにも関わらず、彼は息1つ切らせていない。

「ちょっと！　どーゆー事よ！　天野く……」

「……危機感なしだな」

眉間にシワを寄せながら詰め寄る優姫に、天野竜は呆れたようにため息をついた。

「はあ？　危機感？　意味分かんないっつーの」

「気づかないのか？」

「何をよ。つーか、偉っそーに、何なのあんた」

いきなり引っ張って強引に連れ去って、出た言葉が意味不明。しかもなんかムカつくぐらいに偉そう——優姫は最高に気分が悪かった。

ぎっと鋭い眼光で睨みつけるが、天野竜は気にせずため息混じりで話し出した。

「……あんた、狙われてる」

「だーかーら。意味が分かんないって！　狙われてるって一体——」

優姫は言いかけた言葉を止めた。1つだけ……嫌な光景が脳裏をかすめた。

あの事件。あの時の光景——

「ね、狙われている……？」

再び悪寒が優姫を包んだ。嫌な感じだ、とっても。

「ああ。あんた、狙われてる」

「だから……何で狙われてるのよ！ 説明ないんじゃないじゃない」

問いかけた後、しまった——優姫は思った。

だけど聞きたい、でも聞きたくない。この悪寒は？ もしかしてあの時の——

彼女の疑問に、天野竜はあっさりとそして無愛想に答えた。それは、半分確信して……

「一度……あんたは経験しているはずだが？」

……半分は信じたくなかった事。

天野竜の答えたは遠回し的なもので、だが的^{まど}を得ていた。

経験。それは1つしか該当しない。今現在も震えるこの体と、先程からかすめる記憶——

「だから……なんで……狙われてるの？ いや、べ、別にあれは……ただの、そう！ ただの事故で……しかも、今更……。つか、天野くん……あなた一体、何？」

聞きたい事が上手く言葉に出来ない。

戸惑いながら問いかける優姫に、忙しなく辺りを見回して、天野

竜は途切れ途切れの彼女の疑問に、1つずつ答えた。

「……巫女だから」

「はあ？」

聞き慣れない言葉に、優姫は頓狂^{とんきやう}な声を漏らした。

「巫女だから。あれは事故じゃない」

「いや、だから……意味分かんないって」

「今更ではない。ずっと……あんたを見つけてから、ずっと」

「つか、あたしの話聞いてる？」

「……聞こえてる」

「はあ……」

本当に聞いているんだかいのか……無愛想な顔で答える竜に、優姫は頭を抱えた。全く、話になったもんじゃない。

上手く質問も出来ず、それに答える天野竜も訳が分からず——やりきれない程のむしゃくしゃ感に、優姫は乱暴に頭を掻いた。

意味が分からない。
何言ってるのコイツ。

巫女？

あの神社とかにいる？

違う！

あたしが聞きたいのは、そんな訳の分からないものじゃない！

「だーかーら……」

ため息混じりで再び声を出した、その刹那。

「――ひゃっ！」

強引に腕を引っ張られ、肩を抱き寄せられ――突然な彼の行動に、優姫は思わず甲高い声を漏らした。

そのまま天野竜は、優姫を自身の背後に隠して、手短にそして全てを答えた。

「……訳が分からなくても、今に分かる」

「な、何。いきなり」

「あんたは巫女だ。それ以上でもそれ以下でもない」

不意に風が吹く。冷たく、ぞっとする様な寒気が襲った。

「わっ……！ 何!？」

「あんたは巫女。四神を司り、魔を封ずる事が出来る者」

言いながら、竜は左手の親指にはめたリングを握った。

瞬間、金色の閃光が駆け巡り、あまりの眩しさに優姫は目を瞑る。

「俺は——案内人。巫女と四神を導く者。そして……」

爆散する光が竜の右手に集結する。瞬く間に光が形となり、燦然と輝く剣がその姿を現した。

「……あんたを護衛する者だ」

静謐な口調言って、竜は横目で背後の優姫を見た。

「なっ……！ ちょっと、なによ……それ」

彼が握る剣を見て、目をぱちくりさせる優姫へ——

「……俺は言ったはずだ」

剣を正眼の体勢で構えながら、竜はぼそりと呟いた。

「あんた“狙われてる”と——」

疾風が轟き、重苦しい空気が辺り一面に張り巡らした。じとつとした湿気帯びた一帯と、ざわめく寒気が優姫を襲う。

風を纏いながら“黒い塊”の様なものが現れ——

「……あ、あ……」

再び、“あの時”の獣がその姿を露わにした。

終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0401b/>

彼は四神

2010年12月23日14時08分発行